

# ヨエル書とラオデキア的なセブンスデー・アドベ ンチスト教会-第十回

Jeff Pippenger

2025-12-14

## 10番

私たちは、イザヤ書に記された幻のうち、第7章に始まり第12章の終わりまで続く部分を取り上げています。そうするのは、1850年に主が二度目に御手を伸ばして、ご自分の残りの民を集められたからです。私たちは、1844年から1863年に至る道標を位置づけています。「1850年」と第二の集めは、その道標の一つです。

イザヤの幻は七章一節から始まるが、それ以降、「その日」に類する表現に言及があるたびに、それは七章で確立された預言的文脈に位置づけて理解すべきである。この幻を正しく区分して理解するための鍵は、預言が反復と拡大の原則に基づいて働くことを理解することであり、この原則はこの幻においても作用している。

イザヤ書第6章に始まるイザヤの幻において示されているさまざまな預言的真理は、「何よりもまず」、イザヤは後の雨の到来を告げるために9/11に油注がれた魂を象徴している、という視点から捉えるべきである。その聖別された文脈において、イザヤ書第7章は、第6章で預言者が、「目があっても見ようとせず、耳があっても聞こうとしない」背教の教会に9/11のメッセージをいつまで語り続けなければならないのかと「いつまで」を問うたときに表された、まさにその恐れを描いている。

幻の中で、邪悪で愚かな王アハズは、イザヤとその子らに象徴され、アハズに立ち向かう見張り人たちが告げる後の雨のメッセージの警告を受け入れないラオデキヤ人の象徴である。

9/11は、ダニエル書11章40節の予言的歴史に到来した。ゆえに、イザヤがイザヤ書6章において9/11に位置づけられるとき、彼は予言的にはダニエル書11章40節の中に位置づけられるが、さらに重要なのは、彼が「40節の隠された歴史」の中に位置しているということである。「40節の隠された歴史」は、その節が1989年にソビエト連邦の崩壊によって成就したときに始まった。1989年から、41節の「日曜法」に至るまでが、まさにその「隠された歴史」の中でユダ族の獅子によって封印を解かれる「40節の隠された歴史」である。これが、9/11以後にイザヤを後の雨の使者と見なす私たちの考察において示しているのは、イザヤが宣べ伝えている後の雨のメッセージの一部は、すなわちダニエル書11章41節から45節であるということである。

予言的に9/11の地点に立っているイザヤ書10章は、次に起こる出来事が「不義の布告」、すなわち日曜法であり、それがダニエル書11章41節に表されていると警告している。イザヤによる後の雨のメッセージの例証は、40節の「隠された歴史」（9/11以後）の中に置かれている。1989年に40節が成就したことにより、イザヤは1989年以後、9/11において、祭壇から取り出された炭による油注ぎを受ける。イザヤは、そのメッセージにダニエル

書11章の最後の6節を含む使者を表している。

イザヤは、自分とその子らがしるしと不思議となることを、はっきり述べている。第七章三節では、イザヤと彼の子は、さらし者の野の大路にある上の池の水道のところにいる。イザヤは、第六章で宣べ伝えるために油注がれた後の雨のメッセージを提示しており、後の雨を象徴する三つのしるしの前に、子シェアル・ヤシュブと共に立っている。上の池の水道は、ゼカリヤが指し示し、ホホワイト夫人がたびたび論じている黄金の油で満たされた二本の管への預言的な暗示であり、後の雨のメッセージにおいて、この上の池の水道から来るメッセージが何であるかを指し示している。

イザヤの水道はゼカリヤの二つの管と結び付き、エレン・ホホワイトの注解はゼカリヤ書を十人の乙女のたとえと結び付けている。イザヤは六章で主の栄光を見たとき、塵にまでへりくだらされる。彼は、三節に示されているメッセージを、神の栄光によって地を照らすメッセージとして担うことに同意する。そして彼は祭壇から取られた炭火で清められ、その後、上の池から流れる水によってできた池のほとりに立っている。二十八章でイザヤは、後の雨のメッセージを「行に行」と定義し、三節では、上の池がいくつかの預言のラインを表している。

9/11における魂を表すイザヤは、その魂がエレミヤの古き道へと通じる善い道を求めていたならば、はじめて、上の池から黄金の油が流れ落ちてくる場所に立っているだろう。その古き道こそ、エレミヤの「休み」が見いだされる、イザヤの「さらし場のそばの大路（道）」である。イザヤの後の雨のメッセージは、十人の乙女の系列、ゼカリヤの二つの金の管の系列、エレミヤの古き道の系列のみに基づくのではない。イザヤはまた、契約の使者がレビの子らを銀や金のように清め、浄めている「さらし場」にも立っている。

他の系譜を第七章第三節へと導き入れることは、きわめて容易な預言的作業である。ゼカリヤの油と十人のおとめは、ヤコブのはしごおよび黙示録の最初の二節と結び付いている。なぜなら、それらはすべて、神と人との間の伝達の過程を扱っているからである。エレミヤの古い道には、ラッパを吹き鳴らす「見張り人」が含まれているが、悪しき愚かな王アハズはそれを聞こうとしない。そのラッパは、預言のすべてのラッパと、預言的見張り人たちをも、イザヤの「大路」へと引き寄せる。そこでは、イザヤとその子が立って、ラオデキヤの指導者に一つのメッセージを伝えるのである。

イザヤとその息子シェアル・ヤシュブ（「残りの者は帰って来る」という意味）は並んで立っており、9/11に到来した「後の雨」のメッセージの宣言を象徴している。彼らは邪悪な王アハズに会いに行き、父と子として「line upon line」方法論の根本原則であるアルファとオメガの象徴を表している。「line upon line」は、ミラー派の「日/年」原則によって例示された原則である。

1840年8月11日、黙示録9章の第二の災いに関するイスラムの預言が成就し、ミラー派の「日=年」原則が確認され、それによって同原則に基づくミラーの1843年についての予言に確証が与えられた。2001年9月11日には、黙示録9章・10章・11章の第三の災いに関するイスラムの預言が成就し、アルファ（1840年8月11日）とオメガ（9/11）の原則が確認された。ニューヨークの大建築物が崩れ落ちたとき、黙示録18章の力強い御使いが降りてきた。これは、オメガの型であったアルファが成就した1840年8月11日に、黙示録10章の

力強い御使いが降りてきたのと同様であった。

イザヤとその息子は、「行に行を重ねる」という主要な原則を象徴するだけでなく、父とその子らの関係によって描かれるメッセージであるエリヤのメッセージも表している。

「主の大いなる恐るべき日」の直前に宣べ伝えられるエリヤのメッセージは、神の執行的裁きが始まる直前に到来するメッセージを指し示している。

神の執行的裁きは、「主の大いなる恐るべき日」という期間を表している。

その期間は日曜法から始まり、最後の七つの災いにまで及ぶ。

その期間は日曜法で始まり、最後の七つの災いで終わる。したがってエリヤのメッセージは、恩恵期間の終結の接近を警告することと結びついた、アルファとオメガの原則を前提としている。またエリヤのメッセージには、エリヤに基づくさまざまな預言の系列も伴う。というのも、イエスによればエリヤはバプテスマのヨハネを表し、さらにホワイト夫人によれば、エリヤとヨハネはどちらもウィリアム・ミラーを表しているからである。そしてエリヤとバプテスマのヨハネは共に、十四万四千人（エリヤ）と、黙示録7章の大群衆（ヨハネ）を表している。

イザヤとその息子は土台である古き道のところに立ち、黄金の油を受けている。彼らは、1844年10月22日に成就し日曜法を象徴した晒し職人の浄化の過程を通っている賢い乙女たちだからである。イザヤと、帰ってくる残りの者（それが彼の息子シェアル・ヤシュブの名の意味である）は、9/11に古き道へ「帰る」残りの者を表している。父と残りの者の関係、すなわちアルファとオメガの関係、すなわちエリヤの「父の心と子の心」の関係は、ミラー師と第一の天使の残りの者の運動との関係がフィラデルフィアのアルファの運動であったことを示している。アルファの運動において、ミラー師は、イエスが契約の使者のために道を備える使者と同定したエリヤおよびバプテスマのヨハネとして同定された。第一と第二の天使のアルファの歴史におけるそれらすべての予言的成就是、第三の天使のオメガの歴史において繰り返される。

イザヤが幻の中で示した例証については、さらに重要な事実があるが、ここでは、イザヤが9/11の後の雨のメッセージの中心を成すさまざまな真理を明確に指し示していることを確認しているにすぎない。今しがた論じたこれらの諸点、そしてもちろんさらに多くのものが、七章三節にある。

第8節では、「第40節の隠された歴史」を解き明かす鍵が特定されるにつれて、預言の真理はいっそう強まる。しかも驚くべきことに、その鍵は、二つの2520年の年代預言の始まりが記されている、まさにその同じ節の中で特定されている。

シリアの頭はダマスカス、ダマスカスの頭はレツィンであり、六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて民ではなくなる。エフライムの頭はサマリア、サマリアの頭はレマルヤの子である。

もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書 7:8, 9。

イザヤによる後の雨のメッセージの図示には、モーセの「七たび」が含まれている。というのも、八節の六十五年の預言が、イスラエルの北王国と南王国の双方における2520年の散らしの起点を示しているからである。まさに同じ節の中に、1989年のソ連崩壊を扱う

ダニエル書11章40節、同11章10節、イザヤ書8章8節という三つの預言の線を開く鍵がある（この三つの線＝イザヤ8:8、ダニエル11:10、40）。その鍵は、八節と九節の「heads」である。「heads」の鍵をその三つの並行する節に適用すると、ウクライナ戦争の歴史と、まもなく来る第三次世界大戦への扉が開かれる。その預言の扉が開かれると、ダニエル書11章11～16節が、1989年のソ連崩壊後のダニエル書11章40節に並行する歴史であることが見えてくる。「四十節の隠された歴史」の解錠は、猶予期間が閉じられる直前にイエス・キリストの啓示の封印が解かれることと結びついて開封されたものとして特定される、選ばれた少数の真理の一つである。

イザヤ書第8章第1節は「そのうえ」という語で始まり、第8章が第7章の上に重ねて読まれるべきであることを示している。「そのうえ」という最初の語に加えて、第8章3節は第7章3節と結び付けられており、両章を行に行を重ねて適用すべきだという第二の証しとなっている。どちらの3節もイザヤの息子の一人を指し示しており、その名はいずれも物語の中の預言的メッセージを語っている。シェアルヤシュブは「残りの者は帰る」を意味し、マヘルシャルハシュバズは「略奪に速い」を意味する。まずシェアルヤシュブが言及され、その後マヘルシャルハシュバズ（これは聖書で最も長い名前）が続く。「1」で表されるアルファはより小さく、この場合は「残りの者」としてさえ示されているのに対し、「22」で表されるオメガはより大きく、聖書で最も長い名前によって表されると同時に、日曜法の迅速な動きを象徴している。

シェアルヤシュブによって表されるアルファの残りの者は、3節で父イザヤと共にいる。彼らは共にアルファとオメガであり、後の雨に関する三つの明確な言及で成り立つ場所に立っている。

そのとき、主はイザヤに言われた。「あなたとあなたの子シェアル・ヤシュブは、今、出て行って、さらしやの野の大路にある上の池の水道の端でアハズに会いなさい。」イザヤ書 7:3.

イザヤは十四万四千人の象徴であり、9/11の召しを表すと同時に、2023年7月の召しも表している。9/11においてイザヤは、主の口からアドベンティズムが吐き出される中でエサウの長子権を奪おうとしていたヤコブ（追い落とす者）に象徴されるラオデキア人であり、2023年にはイザヤはイスラエル（勝利者）を表す。イザヤは、神のメッセージを伝えていた者で、自分がラオデキア人であるという事実に目覚め、その後、燃える炭によって清められてフィラデルフィアの者となる人を表している。

イザヤは神の栄光の素晴らしい幻を見た。彼は神の力の現れを目にし、その威厳を仰ぎ見たのち、出て行ってある務めをせよとの召しが彼に臨んだ。彼はその務めに自分はまったくふさわしくないと感じた。何が彼に、自分はふさわしくないと認めさせたのか。神の栄光を見る前から、彼は自分をふさわしくないと考えていたのか——いいえ。彼は神の前で自分は義しい状態にあると考えていた。しかし、万軍の主の栄光が彼に現され、言い表しがたい神の威厳を仰ぎ見たとき、彼はこう言った。「わざわざだ、私は滅びる。私は汚れた唇の者で、汚れた唇の民のただ中に住んでいる。私の目が王なる万軍の主を見たのだから」。すると一人のセラフィムが、祭壇から火ばさみで取った生ける炭火を手を持って私のもとに飛んできて、それを私の口に触れさせ、こう言った。「見よ、これがあなたの唇に触れた。あなたの咎は取り去られ、あなたの罪は

清められた」。これは、私たち一人ひとりのために行われる必要のあるわざである。私たちは、祭壇からの生ける炭火を私たちの唇に置いていただきたい。私たちは、「あなたの咎は取り去られ、あなたの罪は清められた」という言葉を聞きたいのである。レビュー・アンド・ヘラルド、1889年6月4日。

イザヤ書6章の「いつまででしょうか」という問いは、9/11から日曜法に至るまでの象徴であり、6章は9/11を表している。7章から9章は、イザヤがユダの背教した指導者たちに与えたメッセージと、エフライムの酔いどれらがつまずく、十四万四千人の封印の時に起こる出来事の例証を提示している。同じ幻の中で、イザヤは次のように記している：

見よ、私と、主が私に与えられた子らは、イスラエルにおいて、シオンの山に住んでおられる万軍の主からのしりと不思議である。イザヤ書 8:18

イザヤとその子らは、第7章から第9章に見られる謎めいた箇所の中で、しるしである。「その日」や「その時」への言及という点では、幻全体の参照点は第7章から第9章にある。18節はイザヤとその子らがしるしであることを示し、18節の前後の節は、そのしるしが認識される時期を示している。

彼らのうち多くの者はつまずき、倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕らえられる。証を巻き、わたしの弟子たちのうちに律法を封じよ。わたしはヤコブの家から御顔を隠される主を待ち望み、彼を求める。

見よ、主が私にお与えくださった子らと私は、シオンの山に住まわれる万軍の主によって、イスラエルにおいてしるしと不思議である。イザヤ書 8:15-18.

「主を待ち望む」者たちは、イザヤとその二人の息子によって象徴されている。彼らは、主が彼らに対して「御顔」を隠された者たちであり、これは、2023年7月以降にレビ記26章の祈りの求めに目覚める者たちの特徴である。彼らは、自分たちの告白には、主が自分たちに敵して歩まれた、すなわち主が彼らから御顔を隠された、ということを含めなければならぬと目覚める。

「証しを巻き、律法を封じる」とは、「多くの者」と対比される十四万四千人の封印のことである。「多くの者」は召されるが、選ばれる者は少ない。「多くの者」は、少数を象徴するイザヤとその二人の息子と対比される。「多くの者」とは五人の愚かな乙女のことであり、このため彼らには五つのことが起こる。すなわち、「つまずき、倒れ、砕かれ、罨にかかり、捕らえられる」。彼らがつまずくのは、後の雨のメッセージを拒んだからである。

彼は、つたない唇と異なることばで、この民に語られる。彼らに言われた、「これが、あなたがたが疲れた者を休ませる休みである。これが、憩いである。」しかし、彼らは聞こうとしなかった。しかし、主のことばは彼らには、教えに教えを、教えに教えを、規則に規則を、規則に規則を、ここで少し、そこで少し、となった。それは、彼らが行って後ろに倒れ、砕かれ、罨にかかり、捕らえられるためであった。イザヤ書 28:11-13.

イザヤ書第八章の封印の時に、イザヤは、アハズに象徴される悪しき者が倒れることを描き、第二十八章十三節でその同じ人々を指し示している。彼らが「倒れる」理由は、彼

らにとっては「行に行を重ね」た形で、しかも「ども唇」をもつ者として描かれている人々によって語られた後の雨のメッセージを拒んだからである。ペンテコステのとき、揚げ足を取るユダヤ人たちは、そのメッセージを理解できなかったため、弟子たちを酔っていると非難した。彼らには、それがども唇によって語られているように見えた。

第7章3節で、イザヤは息子シェアルヤシュブにとっての預言的なアルファであり、シェアルヤシュブは父に対してはオメガである一方、兄弟に対してはアルファでもある。アルファとオメガの代表として、彼らは天の聖所から伸びる二本の黄金の管が池を作っている場所、まさにエレミヤの古い道の街道のところ、契約の使者がレビの子ら、そしてイザヤとシェアルヤシュブを清めるときに染みのある亜麻布が純白へと変えられる野に立っている。そこに着くと、彼は邪悪で愚かな王アハズに、レビ記二十六章の「七たび」に関するモーセの古い道のメッセージを示す。それは同じ節において、「頭」とは王、あるいはその王の王国、または王国の首都であることを明らかにしている。

その鍵は神の御言葉の光を明らかにし、2014年に始まったウクライナ戦争が、十四万四千人の封印の時とアメリカ合衆国の最後の三人の大統領史において起こるものとして表される聖書の預言の主題として見られるようにする。後の雨のメッセージはイザヤ書十章と十一章によって表されており、そこではダニエル書十一章の最後の六節の内的歴史と外的歴史が記述されている。最初の節、すなわち四十節は、イザヤ書第六章から九章で例証され、その後、十章と十一章では、1989年に封印が解かれたメッセージが内的歴史と外的歴史において示される。後の雨のメッセージの主要なすべての要素がその幻に表されている。

第十章の最後の節々は、第十一章の最後の節々が表しているのと同じ預言的歴史を示している。第十章は外的側面であり、第十一章は内的側面である。黙示録では、七つの教会が内的側面で、封印が外的側面である。第十章の最後の節々では、教皇権がエルサレムに対して手を振りかざしており、これはダニエル書11章45節において誰も助ける者がいないまま教皇権が終わりを迎えることと並行する記述である。

その日、彼はなおノブにとどまり、シオンの娘の山、エルサレムの丘に向かって手を振りかざす。見よ、主、万軍の主は、恐るべき勢いで枝を打ち落とす。丈高い者たちは切り倒され、高ぶる者は低くされる。主は鉄で森の茂みを切り払う。レバノンには力ある者によって倒れる。イザヤ書 10:32-34。

第10章の終わりは人類に対する恩恵期間の終結であり、ダニエル書11章の終わりもまたそこで終わる。

彼は栄光の聖なる山において、海と海の間はその宮の天幕を張る。しかし、彼はその終わりに至り、彼を助ける者はひとりもない。その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が成って以来、その時までかつてなかったような苦難の時が来る。その時、あなたの民は救い出される。すなわち、書に記されていると見いだされる者は皆。ダニエル書 11:45、12:1。

第10章は第1節の「不義の布告」から始まり、ホワイト夫人はそれを日曜法だと指摘しています。

不義の法令を定め、自ら定めた圧制を書きしるす者たちは、わざわざだ。イザヤ書  
10:1

第十章は、ダニエル書11章41節に一致する日曜法から始まり、ダニエル書11章45節の歴史におけるミカエルが立つことに並行して終わる。

「ドウラの平地に金の像が据えられたのと同じように、偶像の安息日が設けられた。そして、バビロンの王ネブカドネツアルが、この像にひれ伏して拝まない者はみな殺される、という勅令を出したように、同じく、日曜日制度を尊ばない者はすべて、投獄と死で罰せられるとする布告が出されるであろう。こうして主の安息日は踏みにじられる。しかし主はこう宣言しておられる、『不義な法令を制定し、自ら定めた苛酷な命令を書きしるす者に、わざわざあれ』[イザヤ 10:1]. [ゼパニヤ 1:14-18;2:1-3, 引用.] Manuscript Releases, volume 14, 91.]」

黙示録11章の「大地震」（13節で日曜法を表す）において、黙示録13章の地から上ってくる獣が竜のように語る時にそれを揺り動かすその「地震」に関連して、イスラムの三つの象徴が示されている。イザヤ書10章では、日曜法は「不義の布告」として表されており、その上には「わざわざ」が宣告されている。黙示録11章の「大地震」では、13節から18節にかけて、第三のわざわざのイスラムが、イスラムの四つの象徴と、日曜法の時にアメリカ合衆国に加える一撃によって特定される。「そしてその同じ時刻に大きな地震が起こった」「第二のわざわざは過ぎ去った。見よ、第三のわざわざがすぐに来る。」「そして第七の御使いが吹き鳴らした」「そして諸国民は怒った」

第10章は、ダニエル書11章41節から、教皇制がその終わりに至る45節までの教皇権を描写している。40節は第10章の叙述には含まれない。というのも、イザヤは、アハズに代表される背教の教会に後の雨のメッセージが提示されるときの、40節の「隠された歴史」を示しているからである。第11章の結論は、同じ歴史における教皇権からの解放を示している。

主はエジプトの海の入江を滅し尽くし、その力強い風をもって川の上に御手を振り、これを七つの流れに打ち分け、履物を脱がずに乾いた地を渡らせる。また、彼の民のうち残される者のために、アッシリアからの大路がある。これは、イスラエルがエジプトの地から上って来た日のようである。イザヤ書11章15、16節。

イザヤ書第10章は同じ歴史の外面的側面であり、第11章はその内面的側面である。神の言葉には外面と内面の並行関係が多く見られ、イザヤによって示されているこの二つの並行する章は、第三の天使の警告を表している。第三の天使の警告は靈感を通して様々に要約されてきたが、この警告を非常に有益に区分する仕方として、それが猶予期間の終結に関わる出来事を表し、同時に個人的な備えの必要を強調している、という理解がある。イザヤ書10章は出来事を、11章は備えを扱っている。

恵みの時の終わりに関連する出来事と、患難の時に備えるための準備の働きは、明確に示されている。だが、多くの人々は、これらの重要な真理を、まるで決して啓示されたことがないかのように理解していない。サタンは、彼らを救いに至る知恵を与えうるあらゆる感化を奪い去ろうと目を光らせており、患難の時が来ても、彼らは備えのないままで見いだされるだろう。

神が、天の中空を飛ぶ聖なる御使いたちが告げ知らせるものとして描かれるほどに重大な警告を人々にお与えになるとき、神は理性を授けられたすべての者に、そのメッセージを心して受け止めることを求めておられる。獣とその像の礼拝に対して宣告されている恐るべきさばき（黙示録14章9～11節）は、獣の刻印とは何であり、いかにしてそれを受けを避けるのかを学ぶために、すべての人を預言の勤勉な研究へと導くはずである。ところが大多数の人々は、真理を聞くことから耳をそむけ、作り話へと向かう。使徒パウロは、終わりの日々を見渡してこう宣言した。「人々は健全な教えに堪えられなくなる時が来る。」（テモテへの手紙第2章3節）その時はすでに来ている。多くの群衆は聖書の真理を望まない。罪深く世を愛する心の欲望を妨げるからであり、サタンは彼らの好む欺きでそれに応える。

しかし神は地上に、聖書、しかも聖書のみを、すべての教義の規範、すべての改革の基礎として堅持する民をお持ちになる。学識ある人々の意見、科学の推論、教会会議の信条や決定（それらが代表する諸教会と同じくらい数多く、しかも互いに不一致である）、さらには多数派の声-これらのいずれも、またはそれらすべてを合わせても、宗教的信仰のいかなる点に対しても賛否の証拠としては扱われるべきではない。私たちは、どんな教義や戒めでも受け入れる前に、それを支持する明白な「主はこう仰せられる」を求めるべきである。

サタンは、神の代わりに人間に注意を向けさせようと、絶えず努めている。彼は、人々が自ら聖書を調べて自分の務めを学ぶのではなく、司教や牧師、神学の教授を自分たちの導き手として仰ぐように仕向ける。そうして、これらの指導者の心を支配することによって、彼は自分の意のままに大勢の人々に影響を及ぼすことができる。『大いなる論争』594、595。

次回の記事でこの研究を続けます。